

---

# 私の名を呼ぶまで

剣崎月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の名を呼ぶまで

### 【Nコード】

N3763Z

### 【作者名】

剣崎月

### 【あらすじ】

とんでもない理由で皇子と結婚することになった【私】冷静になった皇子は【私】の処遇に困っているようだが、理由が理由なので優しくして差し上げるつもりはない……さて？ 【私】はどうなるのだろう。

## 「01」アメリカ、イザベル、シャーロット

「アメリカ、用意はできたか？」

用意はできておりますが、私の名前はアメリカではありません。皇子にとってはどうでも良いことでしょうかね。

\*\*\*\*\*

私は小さな国の王女さまに仕えていた。小間使いなどの傍仕えではなく、掃除や洗濯などの力仕事を任されるほんとうの下っ端。

私が仕えていた王女さまは、王女さまだったが目が覚めるような美女とかそういう人ではなかった。

どんな王女さまだったのか？ 側で仕えたことがないので分からないが……向こう見ずな所がある王女さまだったらしい。そのせいで私はこうして皇子の隣に立つはめになっている。

王女さまは騎士と恋仲になり、婚約が整っていた皇子との結婚を嫌い駆け落ちした。

まさかそんな事をするとは、王も思っていなかっただろう。

王女さまが駆け落ちするとき、私はたまたまその場に居合わせてしまい、騎士に殴られて失神した。仮にも騎士がか弱い下働きを殴るとは……。

殺されなかつただけありがたいと考えるべきか 手足を縛られ猿ぐつわを噛まされて、暗がり目覚めた時にまずそう考えて自分を慰めた。

王女さまと騎士が駆け落ちしたのは、皇子が王女さまを妃として迎えにくる前日。

大国の皇子が王女さまを迎えに来たのは、王女さまに興味を持っていたからではなく、別の用事があった、たまたま帰り道に王女さまがいるので連れていくことになっていたのだそうだ。

私は暗がりです”誰か助けて”と考えながら唸る。そこにやってきたのが皇子が連れてきた王女さま付きの侍女。その侍女に助けられ、「どうしてこのような所に？」

当然の質問をされたので、ことの経緯を告げた。

その時私は、王女さまが騎士と駆け落ちしたことを知らなかった。最後の逢瀬くらいに考えていた。それはそうだろう、王女さまが嫁ぐ先は大国で、下手な行動をとれば国が危ないことくらい私でも分かる。

分かっているはずなのに駆け落ちをしたのだ。

閉じ込められていた私は知らなかったが、王たちは王女さまの代理を立てていた。もちろん皇子には教えずに、顔や雰囲気似ている従妹の姫を王女ということにして。

皇子は王女さまに興味がなかったので、従妹とすぐ変わったことに気付きはしなかったらしい。まさか王が従妹とは言え、偽の王女を妃として送り出すとは思っていなかったこともある。上手く誤魔化せそうだったのだが、そこに侍女が私を連れて乗り込んだ。

侍女の言葉に青くなる従妹の姫、そして王。

睨んでくる王女さまの乳母に、大臣とか、とか。

室内は緊迫し、そして私は皇子の国に身柄を拘束された。殺される恐れもあるから……とのこと。

結局事実が明るみに出て、皇子は激怒した。

王が謀ったことを怒ったのか、王女が駆け落ちしたことを怒ったのか？ 侍女は皇子が怒った理由は王が謀ったからだと言った。

王女が駆け落ちしたことを正直に告げ、その上で従妹の姫を「従妹の姫」として紹介し、妃にするように勧めたら皇子は怒らなかつた。

王は娘である王女が駆け落ちしたことに激怒したと考えていたらしい。

皇子のプライドに傷をつけたと。両方だったのかもしれない。ともかく怒った皇子と、怒りを鎮めて欲しい王。そして皇子は常軌を逸した行動をとった。

「イザベルを妃として迎える！」

イザベルって誰やねん？ と思ったのだが、皇子の指は私を示していた。よくよく考えたら、あの場の下働きの私が連れていかれた時点でおかしいわけだ。

王としては下働き一人で皇子の怒りが収まるのならば安いというか……拒否できる立場ではないので私は皇子の妃になることが決定した。

国民は驚いていた。私だって驚いている。結婚するのは王女さまだと誰もが思っていたのだから。驚きと情報不足からひどい噂が立った……皇子の国に到着してから知った。

皇子が私に一目惚れをし、様々な苦難を乗り越えて国へと自ら迎えにきた と。

この残念過ぎる容姿の私に大国の美貌の皇子が恋したとか……信用されないだろうと思っただが、そういう話が好きな人が一定数いるようで、その一定数に非常に声が大きい人たちが含まれていたらしく、皇子が恋した町娘という不思議なポジションに収まることになってしまった。

\*\*\*\*\*

私は非常に普通の顔立ちをしている。

どのくらい普通の顔立ちをしているかというと、

「シャーロット」

皇子が名前を覚えられないくらいに普通の顔立ちである。隣にいるあの時助けてくれた侍女が曖昧な表情をする。

彼女、最初の頃は「皇子もすぐに名前を覚えますので」「皇子は名前を覚えるのが苦手で」とフオローしていたのだが、さすがにそれも言えなくなる程に皇子は私の名を間違っ。

覚えて欲しいと思ったことはないのだが、覚えないと彼女の胃にきそつだなと思うのでできることなら覚えて欲しい。

私から積極的に動くつもりはないが。

皇子は私と会話することはない。一方的に告げて立ち去る。

共通の話題もない私にとってはありがたい。私は隣国の皇子のことなど詳しく知らない。名前すら知らなかったくらいだ。

いま私が皇子について知っていることと言えば、皇子には兄と弟がいる。この三人兄弟と従兄弟の公子さんの四名の誰かが次の皇帝になる。最有力候補が皇子なのだ。

侍女は、

「皇子が皇帝に立った暁には、皇后ですよ」

言われるが、なりたくはない。

だが残念なことに私は皇子の正式な妃である。

どうも本当は違う人が正式な妃にしようとしていたらしいのだが、あの騒ぎでこの状況。皇子が正式な妃にしようとしていた女性は、側室の誰かだった……らしい。

伝聞ばかりなので”らしい”が続くが、詳しく知ったところでどうにもならないので”らしい”だけで充分。

どうしようもない理由で皇子の妃となった私、そして皇子には側室がたくさんいる。側室には私の故国よりもずっと大きな国の姫さまもいる。

「どうしてあなたみたいな、普通の娘が妃に選ばれたのかしら」

”それは憤怒を拗らせた結果です”とも言えないので、私は黙っ

て俯く。泣いているのではなく、笑いたくなる気持ちを抑えるために。

大国の姫さまからはわざわざ足を運んで嫌味を言ってもらえるくらいには嫌われている。私は正妃で、皇子の妃のなかではもっとも身分が高いので、大国の姫さまが出向かなければ会うこともないの  
で、こつこつ頑張ってやって来てくださる。

生産的なことに時間を費やしたらいかがですか？ 思うが、側室の生産的なこととは、夜のお勤めだけで、あとは消費行動のみだ。

高い陶器のティーセットに、紅茶の葉に、小麦粉と砂糖と卵で練成した毎回違う菓子に、果物と砂糖を鍋にぶちこんでとるととると煮てかき混ぜたものなど。

私、紅茶より珈琲のほうが好きなんですけれどね。

大国の姫さまが嫌味のつもりで言っている台詞は、皇子からも聞いている。

「あの時自分はどうにかしていた」

言わなくてもいいです。それは私も侍女も思っていることですから。

## 「02」 シュザンナ

皇子が冷静になっても周囲はなかなか冷静にはなれないようです。でも周囲を責めることはできませんよね。悪いのは皇子ですから。

「シュザンナ」

シュザンナって誰やね？

「お前の故国から側室がやってくる」

……どうやら私のことのようにです。まあ皇子がこの部屋で話しかけるのは私か侍女だけで、侍女はシュザンナではないので私以外はありえないのですが、呼ばれていると気付けないので「？」となり、口を挟む機会を失う。

それにしても私の名前、そんなに覚え辛い名前じゃないんですけれど……皇子に覚えて欲しいと思いはしないので、それはそれで良いのですが。

故国からやってくるのは従妹の姫。王女さまの代役に選ばれた方がやってくるのか。

従妹の姫さまにこの地位を譲れと？ それは良いですねと思ったのですが、どうやらそうではなさそうでした。

ただ来ることを教えただけ。そして部屋を出て行きます。皇子の思うところが分からないので私は黙って見送りです。

することがない暇な私は、後宮を観察するのが日課になりつつあります。側室の方々の生活を見ると、とても真面目。

どの側室も読書家でいらしゃって、宝石よりもドレスよりも本のほうが良いのだそう。舞踏会など開かれず、皆実家で政治などの学問を教え込まれ、贅沢は敵だと育てられ。後宮って想像よりもずっと地味だなと呟くと、

「一時期流行ったんですよ」



侍女が笑いながら教えてくれた。

ここ五十年くらい王の心を射止める女性は「小国の姫。女騎士。侍女。取り立てて美人ではない。読書好き。派手な物には興味がない。質素儉約。控え目あるいは男勝り。剣が使える。知性派」そして何より重要なのは【皇后になるつもりなんてありません】という態度なのだそうだ。

貴族や王族も馬鹿ではないので、ならば王の心を射止めるために娘を「そのように」育ててるとして……結果、後宮は下手をすると下町よりもぼそぼそした感じになっている。

全体として地味。私の故郷よりも地味。

だって誰一人としてお茶会なんて開かず、ただ黙々と土いじりをしたり、本を読んだり……ここは修道院ですか？ と言いたくなるような静けさ。

侍女も以前は一人に十数名つけられていたのだが、質素を尊び気付いたら一人に一人。

物語に登場するような華やかな世界ではない。

私の所にわざわざ嫌味を言いに来た大国の姫はかなり浮いている模様だ。こんなぼそぼそとした所で気を張っていると思うと少し労りたくなるので、私は今日も大国の姫から悪口を黙って聞く。

私の名前をしっかりと覚えている大国の姫の悪口を聞きながら思ったことは、皇子のお母さまも地味な人だったのかなあ？

大国の姫が帰ってから、侍女から流行りの「選ばれる女性」について、詳しく聞いてみた。

「お妃さまは”沿った”御方ですよ。元侍女ですし……」

私は元侍女で取り立てて美人じゃないものね。言葉を濁したことについては聞かなかったことにしておく。

そうか私と皇子の噂が広まったのは、流行りに沿っていたからなんだ。世の中の夢見る少女にとっては歓迎するべきことなのかもしれないが、私にとっては迷惑な風潮だ。

ついでと言っては駄目なのだろうけれども、皇子の生母も”沿った”人だったのかと尋ねたところ、

「お美しい方だったそうです。美貌を王が認めて側室に」

おや？ 綺麗なのか。

だがどうやら美人は三日で飽きるを王が地でやってしまったようで、連れてきて数度手を出してあとは放置、そして生まれたのが皇子。

「美人はいつも平凡顔を恐れています」

なんとも大変なことだ。貴族さまたちの世界がそんなことになっていたとは知らなかった。

……でも、何となく解った。王女さまが側室の一人になれたのは、顔が普通で小国の姫だったからだ！ なんと失礼な……失礼なのは私か。

パーティーが開かれ私も出席することに。その会場にいたのは、これもまた地味なご夫人方だった。どの方も知的さを前面に出し、数名は男装していたりと……。

私一人だけの凄い豪華なドレスで、目立って仕方がなかった。

そうか王が地味目な普通顔で真面目を選ぶから、家臣もそれにならってこうなるんだ。恐いなあ。

その会場で一人すごく綺麗な女性を見かけた。

他のご夫人方のようにシンプルな地味な色のドレスを着て壁際に立っている方。綺麗な黒髪に白い肌に、銀色のこれもシンプルなネックレスが映えて、本当に美人だった。

パーティーが終了し部屋へと戻ってから侍女に、あの人は誰かと尋ねたら侯爵令嬢なのだそうだが……綺麗なので嫁の貰い手がないと。

「正確に言いますと、侯爵が”どうせ嫁いでも、後からきた身分の低い不細工に追い出されるのだからどこへも嫁がせぬ”と仰って、結婚させてもらえないそうです」

「どんだけ平凡顔の読書家質素信仰が浸透しているのだ。」

「今の所身分の低い者は美しい女性を妻にしていますが、美しい妻を見れば女を見る目がないと言われる世の中なので、出来る限り普通で地味目で散財を嫌う女性を欲しがりますね」

「そう教えてくれる侍女の顔を見る。侍女は美人と普通の間くらい。」

「後宮で良い人を見つuckerのは、ちょっと難しいのかもしれない。」

「うわー見えないところでしてくださいよ、皇子」

「侍女と話を終えて寝る準備をして出窓に座って風景を見ていたら、皇子と侯爵令嬢が抱き合っている姿を発見。」

「見えるところで逢い引き中なので、かぶりつきで見させてもらいますよ皇子」

「木が生い茂って隠れるに適しているかと思っているのだろうが、私の部屋寢室からは丸見え。せつかなので下世話に窓に張り付いて二人の逢瀬を凝視する。」

「月明かりの下、美貌の男女が抱き合っている姿は絵になる。女性のほうが涙を流しながら抱きつくさまは、私が憧れた世界そのもの。二人は離れ難そうにキスをして、その場を去った。いつの間にか背後にいた侍女も私同様、窓にかぶりつき。」

「身分も家柄も問題ありませんが、美人ですからねえ」  
「可哀相過ぎる。」

「なにより皇子はお妃さまを迎えたので……………侯爵は許さないでしよっ」

私が普通だから美しい侯爵令嬢では勝てないと言っことですね。  
過去、どれほどの美女が地味女に敗北したのか？ 想像するだけで  
怖ろしい。

皇子のことはまったく尊敬申し上げていない自業自得だとは思え  
ど、少しだけ憐れには感じた。恋した相手が美人だから妻に出来な  
いだなんて。

気付いたら故国から従妹の姫さまが後宮入りしていました。

こんな場合はお茶会に呼ぶべきなのだろうか？

「……話を聞いていらっしやいますの？ 貧しい家柄の出のお妃には、話が難し過ぎたかしら？」

大国の姫は呼ばなくても一日おきにやってきてくれるものの。

大国の姫の故国の自慢話ばかりですので、難しくはありません。

でも”難しくない”と訂正する気にもなれませんし。

しかし今日も今日とて元気な方だ。

話は尽きないようので語らせておくが、私は暇なので目の前の大国の姫を観察してみることにする。

大国の姫、身長は私より高く、体重は見た目だけでは解らない。細からず太からず、くびれるところはくびれ、出るべきところは出ている。ただしお尻は解らない。椅子に座っている時に後ろ側に回るわけにもいかないし、妃として頂点に立っているので彼女の後ろを付いて歩くこともない。

大国の姫らしく、肌は白くて透き通るようで顔の作りも上品。

綺麗というのなら侯爵令嬢ですが、可愛らしさがあるのはこの大国の姫。全員を知っている訳ではないけれど、後宮にいる側室の中でもっとも可憐で美しい……美しい？ あれ？

どの国もこぞって不細工を後宮に送り込んできているのなら、この大国の姫の容姿は異質だ。

いつも聞いている素振りでもまったく聞いていなかった話に耳を傾ける。なにか重要な事が聞けるか？ と思ったが、そんなことはなかった。

解ったのは四人姉妹の次女だったことだけ。もう少し、実のある話をして欲しいものです。

「ヘッセニア」

侍女も私もヘッセニアという名ではありませんよ皇子。二人とも一文字も名前かすってませんって。

皇子の適当さ加減を蔑みつつ、話を聞くことに。

皇子も私と話などしたくはないでしょうが、なにせ皇子の寝室は私の部屋を通り抜けないと辿り着けない作りになっているので、どうしても顔を合わせることになる。

無視して通り過ぎてくれて構わないのですが、声をかけてくる。

声をかける前に、名前を覚えてこい！ ……別に言いたいわけではない。適当に覚えておくといいと思います皇子。

私は皇子と食事中。

後宮で食事を取る場合は、妃の部屋以外は禁止なのだそうですよ。無言のまま皇子と食事するのは構わないのですが、

「なにか聞きたいことなどあるか？」

初めて話題を欲しいと話をふられたので、大国の姫について聞いてみた。

「知らん。あの女のところには通わないつもりだ。あの女もその条件に納得して後宮にきたはずだ」

触れないのに側室？

皇子が部屋に戻ってから侍女に何か知っていることはないか？

聞いてみたら、知りたいことは侍女が全部知っていた。

「四人姉妹のなかでもっとも美人な方です。美人なので両親である大国の王も嫁に出す気はなかったようですが、本人が希望してやって来ました。ご本人が美人だから許したのでしょう。当国とは同盟関係にありますし、跡継ぎが生まれたほうが問題になりますから、このまま何事も無く手折られない側室のまま終わるのは確定ですね」

「可憐な美人なのに可哀相なこと。ところで問題があるってどう  
いう事だろう？」

\*\*\*\*\*

「継承権を持った子が外国で誕生すると厄介ですからね」

私の部屋にやってきた皇子の従兄が、大国の姫が触れられない理  
由を噛み砕いて教えてくれた。

本日いきなり挨拶に来て、そのまま居座って茶を所望した従兄殿。  
話すこともないのだが、なにか話さないと帰りそうにもなかった  
ので聞いてみたのだ。

「貴方はご自分が元侍女であることを気にしているのですか？ 後  
宮は基本身分のない女が入る場所ですし、下手に身分のある姫が子  
を産むと王位継承権が複雑になるので、誰も良い顔をしません。私  
は陛下の姉を母に持ち皇位継承権を持っております。同じことが後  
宮でも言えます。後宮に姫を入れて、その方が子を産むと当国の皇  
位継承権と他国の王位継承権を持った子が誕生するのです。その子  
が他国へと帰り王位を継いで、当国に跡取りが生まれなかつたらど  
うなります？ 他国から来てもらわなければならなくなるのです。  
その方が側室の子でしたら国内に残っている私のような立場の者を  
戴くことも可能ですが、正妃の子であつたら他国にいる王子のほう  
が継承順位は上になりますから」

美形だが”気障”な感じのする従兄殿は話続ける。

「大国相手ですとぶつかりますが、小国相手でしたら後継者を得た  
時点で簡単に併呑できますから。物語が小国の姫や侍女が多いのは、  
利害関係上、大国の姫は後宮入りしないからです。後宮にいるのは  
小国の姫や侍女が圧倒的に多いので、必然的に正妃は後盾の弱い

女性になります。ですからお妃が言われた彼女は、かなり浮いています。彼女以外の容姿が優れていないペネロペ王女やシャキラ王女、カンデラス王女がやってきた所で同じことでしょう」

従兄殿は私の質問に答えてから、

「明日お迎えにあがりますので」

有無を言わずに言い、招待状を私に握らせて去っていった。

私は彼の見送りもそこそこに招待状を開き”なんの招待状なのか？”を確認する。

皇帝夫妻からの招待状だった……彼、これを届ける使者だったのか。なんてよく喋る使者なんだ。

夜半にやってきた皇子に招待状を見せて、どうするべきかを尋ねた。皇子は眉をつり上げて舌打ちをしたが、

「拒否はできないな……明日か。私が用意はさせておく、ユリアーネ」

招待は受けることになった。

そして私の名前はユリアーネじゃないって。名前、本当にかすりもしない。ついでに皇子に大国の姫とその姉妹の名を聞いたら、

「ペネロペ、シャキラ、カンデラスだ。後宮にいるのはエスメラルダ。それがどうした？ ユリアーネ」

間違えずに答えやがった。

皇子は名前を覚えられない病気かと思っていたが、どうやらそれは私だけに対してかかる病気のようにですね。



「04」クリスティーナ、マーヤ、エリヴィラ、メアリー

翌日

「用意は整えた」

皇子は国王夫妻への面会に必要なものを整えてくれたが、

「一人で挨拶してこい、クリスティーナ」

同行はしないのだそうだ。

そして今日も朝から名前間違ひ。だから一文字もかすつてないつての。

国王夫妻の使者としてやってきた従兄殿が、それは喋り続けられる。私の緊張を解すというよりも、彼は話すのが好きなのだろつ。「そう言えば、貴方の故国からやって来た姫が新しい侍女を雇い入れました」

建前上、皇子の後宮の主である私ですら知らないような、本当に些細なことまで本当によく知っている。

細い顎と白い肌と、亜麻色の髪と……なんとも信用できない風貌だ。従兄殿の情報の裏を取って正しければ、今後は従兄殿からも情報入手することを考えよう。

皇帝夫妻が待つ部屋は……地味だった。

後宮の私の部屋のほうが派手で豪華だ。皇帝はなかなか格好良い男性だが、

「会えて嬉しいわ」

声をかけてきた女性は地味だった。

着衣もかなり地味だけれども皇后陛下……だよな？ 着衣も容姿も地味だと悩まされるなあ。部屋の奥のほうに美人が居る。若い美人じゃなくて年を取った美人。

なんだろう……どこかで見たことあるような。

皇帝が”皇子の生母”だと紹介してくれた。そうか皇子に似てい

るんだ！

皇帝夫妻はわりと碎けた感じのいい人でした。

皇后は皇子が皇帝になることを望んでおられるそう。

「貴方ならきつと良い皇后になるわ」

話しぶりからすると皇后にも実子がいるようなんだが、やたらと皇子に肩入れしていて、奇妙な気持ちになる。

皇帝夫妻には嫌われてはいないようだが、皇子の母、姑さまには好かれてないようだ。

従兄殿同伴で姑さまとお話したのだが、とげとげしくてびっくりはしなかった。従兄殿に送られ後宮へと戻ってから侍女に、故国の従妹の姫が新しく侍女を雇ったのは本当かどうかを尋ねた。

侍女は知らなかったようで、確認してくると部屋を出ていった。私は堅苦しい正装を脱ぎ捨てて、ベッドに横たわり手足を伸ばそうと寝室へ向かう途中、またもや逢い引きしている皇子と侯爵令嬢を発見。

疲れていたのだが、なんかこう……楽しそうなので、今日もかぶりつきで見ることに。

侯爵令嬢、今日は男装していた。

でもその美しい姿は男装するとより一層目立つ。光沢があり艶々の黒髪を皇子が掴み、赤い紅を塗った唇に触れる。

いいですねー。私は姑さまに嫌味言われて帰ってきたというのに、皇子は美女とお楽しみですか。

帰ってきた侍女と一緒に二人の逢瀬を眺めながら、集めてきてくれた情報を聞いた。従妹の姫はやはり侍女を新しく雇っていた。

この国の後宮は侍女は一人につき一人と決まっているので、前任者はとうぜん解雇。

新しい侍女がどんな人なのかまで情報を仕入れてきてくれた。

「髪は茶色味を帯びた赤毛で、背は低く、主とよく似ています。喋る言葉のアクセントからしても同国人のようです」

あれ？ 駆け落ちした王女さまも茶色味を帯びた赤毛で、身長が低めで従妹の姫とよく似ていたよね……。

「皇帝夫妻はお前のことを気に入ったようだ、マーヤ」

だからマーヤって誰だったの！ 私はマーヤじゃなくて！ それよりも、従妹の姫のところに侍女として王女らしい人が居ることを皇子に伝えた。

皇子は昨日皇帝夫妻からの招待状を見たときはまた違う渋い表情をつくり、食卓に部下の女騎士を呼び何かを耳打ちした。

皇子に付き従っている女騎士を間近で見たのは初めて。

プラチナブロンドの髪は女性とは思えないほど短く切りそろえられている。短髪は彼女の顔に合っているが、伸ばしてもきつと似合うだろう。

女騎士は心得たとはつきりと解る表情になり、礼をして立ち去る。私たち女性とは違う動き、でも男性とも違う、鍛えられた女性のみができる動作。

それはともかく皇子。

唇が少し赤いです。皇子らしからぬ血色の良さです。食事をしていると段々色が取れていきますけれども。

そうか、誤魔化すためにここで食事をとっているんですね！

「……本当か？」

悪口ではありませんよ、皇子。

事実ですから。姑さまがわざとお茶を零して、私のドレスに染みをつくってくれたのは。皇子が送ったドレスだと知りながらの仕業

です。

「そういう人かもしれないな」

皇子はマザコンではないようだ。それどころか部外者で厄介者で、名前もちゃんと覚えていない私の意見を簡単に信じるとは、仲悪いのでしょうかね？

知ったことではなく、その程度のことには耐えられるので。

「気にならないと言うのか？」

実家も同じような感じだったんですよ。

父親とその母親、私から見たら祖母が同居していて、それは性格の悪い婆さんでした。父親のことをいつまでも息子扱いで、父親も息子扱いされて喜んでいるような、母親が婆さんに虐められているとき庇いもせず、むしろ一緒にいびるような。

結婚なんてするもんじゃない、どうしても結婚しなければならぬのなら、夫の母親、もしくは両親が死んでいるのを選ぶと。いびる婆さんと尻馬に乗ってる幼稚な父親に堪忍袋の緒が切れた母親は離婚して街へ出て、お屋敷のお手伝いの仕事を得て、私を育ててくれました。

お屋敷の女主人は姑さまや婆さんと同じような性格だったが、金ももらえるのなら我慢はできる。

我慢して働いて、その縁で私は下働きながらお城へと入り……思えば姑の性格が悪かったせいでお妃になり、お妃になった先でも性格の悪い姑さまと遭遇し……。

やっぱり結婚なんてするもんじゃないですね。

皇子は食事を終えると部屋へと戻られました。

「ではな、マーヤ……私が対処する」

だから私はマーヤじゃなくて、そして皇子は何を対処するのですか？

頭がよろしくない私にはさっぱりと解りません。

私と皇子はなんと清らかな関係。皇子は早い段階、私の故国の城を出たあたりで冷静になり、私と別れることを念頭に置いているので触れはしない。

皇子の好みがああ美しい侯爵令嬢なら、納得できるといふもの。もしも私の部屋に渡っていたら、出窓から自分たちが逢瀬を楽しんでいる場所がもろ見えであることを知ることができるのですけれども。私は教えてあげるつもりなどなく、今日も清らかに別寝室。

皇子、脳裏に侯爵令嬢を描いて元氣にお休みください　皇子が消えた扉を見つめながらそう考える私の表情は、邪悪な笑顔に違ありません。

\*\*\*\*\*

数日後

「エリヴィラ。メアリーは新しく雇った侍女は、王女ではないと言っている」

あー。メアリーは王女さまの従妹だから、エリヴィラが私のことを指している……のかな？　話の流れかしらしてそうだね。

私は王女さまの小間使いではなかったので、どのような方が詳しくは知りません。

皇子が問題だと考えるのならば、ご自分で探ってください。私には関係のないことですか……。

「メアリーがなにを企んでいるのか探れ」

探れといわれても……従兄殿に聞いたほうが早そうですね。私は私で調べてみて、なにも解らなかつた従兄殿に頼ってみよう。

「話を聞いていらっしやるのかしら」

今日も今日とて元気にエスメラルダ姫が訪れてくれました。メアリー姫に直接聞くわけにはいかないから……エスメラルダ姫がなにか知っていたら儲け物だ。

そう思っただけを聞いたのですが、エスメラルダ姫ほどの御方になると、小国出のメアリー姫の動向なんて気にもならないようです。

「貴方のほうが地味顔ですからね。あんな普通過ぎる顔立ちが勝てるはずがありません」

メアリー姫すら視界にないのなら、侍女になっている王女さまなんて気付くはずもないか。顔が似ているからよけい気付かれないかもしれない。

なにも聞き出せなかったので、あとは彼女が喋るままに聞いていた。

「わたしは幼い頃から美しく、皆に泣かれたものです。もつと醜くなければ嫁ぎ先がないと。乳母はそれは心配しておりましたわ」

はいはい、たしかにエスメラルダ姫はお美しいですが、可愛らしい盛りりに、そんなことを言われて育ったとは。私が住んでいた村では、美人はもてはやされたものですけれども。

「わたしは四姉妹で唯一美しく、姉のペネロペや妹のシャキラ、カンドラスとはまったく違う顔立ち。美しいと言われた先々代のお妃に瓜二つでなければ、母上は浮気したと思われたことでしょう」

先々代……その頃はまだ美人でも正妃になることができたのか。

昔のように美人を王妃という形に持つていけば、皇子は侯爵令嬢と幸せになるけれども、エスメラルダ姫は幸せにはならないな。

幸せにしてあげたいとも思いませんが。

「三人ともわたしが皇子の後宮に入ると聞いて、嘲笑ったわ。」あなたのよう美しい人に、皇子が興味を持つはずない」とね。あの時の見下した表情！悔しくて……思い出しても」

そんなことはありませんよ、エスメラルダ姫。皇子は美人好きです。好きというより大好き、いいえ愛してます。

エスメラルダ姫以外の方ですけれども。

しばらく故国にいる三人の姉妹がどれ程厚遇され、自分がどれ程辛い日々を送ったのかを聞かされた。誇張があるのかどうかは解らないけれども、

「私は三人の王女さまは、エスメラルダ姫のことが好きなのだと思いますが」

私も侍女と同意見。

三人の王女さまは本心からエスメラルダ姫のことを気遣って「側室になるのは良いが触れない」と宣言した皇子の元へ行くなど言っただよようにしか聞こえない。そして一生結婚しないで、城でお姫様生活満喫するべきだと。

でも彼女はそう取れなかつたんだね。

美人は褒められ過ぎて性格が歪むことは聞いたことあるけれども、あまりに美貌を嘆かれて好意を好意として取れなくなってしまっているのは……大変なことだな。

個人的な意見としては、エスメラルダ姫は故国に帰ったほうが幸せになれそうだな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3763z/>

---

私の名を呼ぶまで

2011年12月28日07時46分発行